

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第806号 平成26年9月19日

アイヌ民族はいない？

札幌市議会議員の金子快之氏が自身のツイッターに「アイヌ民族なんて、いまはもういない。」「利権を行使しまくっているこの不合理。納税者に説明できない。」と書き込んだ問題について、自民党札幌市支部連合会（自民札連）は、金子市議の除名を決めました。

金子市議の発言は、社会に大きな衝撃を与えています。

菅官房長官は金子市議の発言に対して「アイヌ政策の推進に取り組んでいる政府の姿勢を理解されていないというのは、極めて残念（8月25日付北海道新聞から）」と述べ、また、高橋北海道知事も「アイヌ民族としての文化、伝統、考え方、自然観等を大切に生きている人がいっぱいいる（8月22日付北海道新聞から）」と説明しています。

発言の自由は当然認められるべきですが、しかし、何をいっても許されるという事ではないはずで

金子市議は、今回の自民札連の方針に対して、「多様な声を受け止めるのが自民なのに、一部だけを取り上げて除名はどうかと思う（9月10日付朝日新聞から）」と述べており、自身の発言に対して撤回も反省もする意思は全くないようです。

金子市議は、彼のブログにおいて改めて発言の趣旨を説明していますが、それを見ると、

- ・アイヌというだけで、何故行政から手厚い支援が受けられるのか
- ・アイヌであるかどうかの判断基準があいまい
- ・アイヌであるかどうかの判断を、不正経理等の問題を起こしている「北海道アイヌ協会」が行っているのはおかしい

という事のように

また、金子市議は、「明治時代の北海道旧土人保護法以来、アイヌの方々にはご苦労があったでしょうし、私もアイヌ文化や歴史を否定するものではありません。私が問題としたいのはアイヌを称する利権の問題であり、これについてこれまでも議会で指摘してきましたし、今後も問題提起を続けていくつもりです。」と述べています。

つまり、金子市議が本当に問題にしようとしたのは、アイヌに対する現行の支援

制度の在り方なのかも知れません。それを、彼は「アイヌを称する利権の問題」と称していますが、それならば現行の支援制度そのものの問題点を明らかにすればよい訳で、それがどうして「アイヌはもういない」という主張につながるのか、私には理解出来ません。

道庁では7年に1度、道内のアイヌ民族の生活状況等を調査しており、昨年の結果によると、アイヌ民族である人は約1万7千人となっています。しかし、市町村が把握しきれていない人やアイヌである事を隠している人もいると思われ、実数はもっと多いといわれています。

金子市議は、アイヌ民族の定義が

- ・アイヌの血を受け継いでいると思われる人
- ・婚姻・養子縁組等によりそれらの方と同一の生計を営んでいる人

という事では曖昧だと批判していますが、だからといって、アイヌはいないと断言するのは余りにも乱暴だと思います。

和人がその昔、初めて足を踏み入れた北海道はアイヌの人達が狩猟等を生業として暮らしていました。明治政府は、彼等アイヌの人達を旧土人と称し、強力な同化政策を進めますが、その過程で、彼等のコミュニティは崩壊して行きます。生業を失ったアイヌの人達の生活には大変厳しいものがありました。

更に、「コタンの口笛」という物語を読まれた方は多いと思いますが、アイヌの人達は就職や就学等様々な場面で差別に苦しんでも来ました。アイヌの人達の中に未だに生活保護等の支援を必要としている人が多いのは、そうした歴史的背景を今日においても引きずっているからではないでしょうか。

金子市議は、自己の主張を補強する意図だと思いますが、北海道大学新聞に掲載された「なぜアイヌのみ異民族扱い」という故知里眞志保氏（当時北大教授）の一文を紹介しています。

その中で、知里教授は、アイヌのみが日本人の中で異民族扱いを受けているのは「去年行われた熊祭りに見られるように未だに沢山の日本人がアイヌを見せ物根性で見、特異な者として見たがるどころから来ている」と書いています。

この一文は、1955年（昭和30年）1月に書かれたものですが、当時においてさえ、アイヌの人達に対して日本の社会が差別的であった事を物語っています。

知里教授は、「津軽藩のアイヌに対するフレ書の中に「エゾを人に取り立てる」とある。このように見るとアイヌは人ではなく、何か他の動物のように思われます。このようなものの考え方の残滓を今の日本人は早く拭い去ってほしい」と述べていますが、これは「アイヌ人はいない」という事ではなく、「アイヌ人も対等な一人の日本人としてまっとうに扱うべきだ」というのが、彼が本当にいいたかった事では

ないでしょうか。

また、知里教授は、「アイヌ文化は明治時代以前に滅びてしまって、その後はいわゆるアイヌ系日本人に寄ってその文化が多少とも保たれてきた」と述べていますが、それは、明治政府の同化政策の結果であり、その事を以て「アイヌ民族はいない」とか「アイヌ民族は先住民族ではない」という論拠にはならないと思います。

多くの苦難の中から、アイヌ民族の誇りと、ユークラを初めとする自分達の文化を受け継ぎ、守って来た多くの人達の努力があったからこそ今日があるのだという事を、私達は決して忘れてはならないと思います。

(塾頭：吉田 洋一)